
クロマグロ ~発動篇~

スグル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロマグロ～発動篇～

【NZコード】

N8981B

【作者名】

スグル

【あらすじ】

料理番組を駄目にした奴が、再び、帰ってきた。奴は、なんのため料理をする…。奴の名は、黒鮪黒陰…。

(前書き)

今作には、下ネタが含まれていますので、不快に思われたら、この場で謝罪させて頂きます。

僕は今日、体調が悪くて、学校を休むことにした。最近、雨降りが激しかったから、自分の体調管理がなってなかつたようだ。そういうや、以前、学校に行くのが嫌になり、わざとズル休みしたなあ…。あの時は、本当に、何事も嫌で仕方なかつた…。そつ考えていると、ふと、あることが思い出された。

「はつ…」

僕はベッドで横になつていたが、急に立ち上がり、テレビのリモコンを握つた。

「皆さん、こんばんはーー！『シンデレ料理タイム』のお時間ですーー！」

テレビをつけたと、むかつくへりこに明るいアナウンサーが、キッチンに立ち挨拶をした。

昼過ぎのこの時間は、ローカル局で、いつも料理番組をやつているのだ。

そして、僕は以前、この料理番組で信じられない光景を見てしまつた…。

「今日のお料理の先生は…」

と、ブラウン管でアナウンサーが料理の先生を紹介しようとしていた。

まさか、あいつか…。あいつなのか！？

そう僕が、思つていると…。

「萌川料理学校講師の海野幸先生ですーー！」

あれっ？

アナウンサーが、そつぱつと、ポップな音楽に合わせ、かなり可愛

いHプロン姿の女の子がキッチンに現れた。

「こんなにちはー！」

萌えーな、その先生は可愛く挨拶をした。

あれ、あいつは、どうしたんだ…。あの忘れもしない黒い男は…。すると…、アナウンサーの顔が急に暗くなつた。

「そして、今日のメインゲストとして、もう一人、料理の先生に来てもらいました…」

えつ！？

アナウンサーから、明るさが消えた。
ま、や、か、！、？

「濁汁料理学校講師…、黒鮪黒陰先生です…」

アナウンサーが、そう紹介すると、ポップな音楽が合わせ、長髪の目の下のクマがヤバい奴が現れた。

奴だ！！間違いない！！あいつだ！！

僕は自分が風邪気味だったのを忘れた。

奴は、キッチンの前に立ち…。

「こんなにちは…」

あの魂に穴を空ける低く暗い声が、テレビから響く。
アナウンサーは、無理して笑顔を作り、挨拶を返す。

あの萌えーな感じの海野幸先生も、可愛く挨拶を返した。その様子から、彼女は黒鮪のことは知らないようだ…。
にしても、見事なまで、女の子講師と、黒鮪は合わないな…。

「アナウンサーさん…」

黒鮪は、アナウンサーに話し掛けた。

「あつ、はい…」

無理に笑顔を作つて、アナウンサーは返事をした。

「こないだの放送（『クロマグロ』参照）のおかげで、僕、生まれ

て初めて、ファンレターをもらいました……

おおつ、明るい話題だ。

「ええー、本ですか！？」

アナウンサーが、それで自然な笑顔を取り戻し、明るく返答した。

「内容のほとんどが、『地獄に堕ちる』でしたがね……」

アナウンサーの顔が凍る。海野先生も。

「あと、宛名が『黒鮪黒影』と、『かげ』の字を『影絵』の『かげ』と間違つて書いて送る人が居ます……。僕の名前の『かげ』は、『陰毛』とか『陰部』とか、いん…、ふがつ……」

アナウンサーが、喋つている黒鮪の口をもぎ取るよつに掴んで黙らせた。すごい形相で……。たぶん、爪を立てている……。

海野先生は、冷ややかな視線を黒鮪に送つた。

「はい、では、料理を作ります……」

いきなり入ったCMが開けると、黒鮪の口に絆創膏が貼られていた。アナウンサーさん、気持ちは解るが、掴みすぎだ……。あれ……、アナウンサーの姿がテレビから居なくなつた……。黒鮪と、海野先生しか居ない……。

海野先生しか居ない……。

「え……、今日は、海野幸先生が僕のアシスタントをしてくれるそうで……」

と、黒鮪は海野先生に目を向け言つ。

黒鮪の隣に、必死で笑顔を作る海野先生が、奴のアシスタントをするのか……。あのアナウンサーさんが居ないせいか、激しく不安になつた。

「はい、よろしくお願ひしますーー！」

明るく海野先生が、声を出すと……。

「いやあ……、海野先生はキューートですね……」

「やだあ、黒鮪先生、お世辞ですか？」

おおつ、よくやつたぞ、黒鮪。番組が明るくなつたぞ。

「お世辞では、ありませんよ……。海野先生は、可愛いです……」

「黒鮪先生つたらー」

容姿は、結構ビジュアルな黒鮪。だからか、海野先生も、ちょっとまんざらでもない様子。

いいぞ、番組が明るくなつたぞー。すると、黒鮪が……。

「でも……、深夜アニメ、『萌えツ子戦士モエサス』のホレサスの方が可愛いです……」

テレビから音声が途絶えた。

『萌えツ子戦士モエサス』とは……。

深夜帯放送のアレな内容のアレなテレビアニメーション。

知つている人は、知つている。知らない人は、知らなくていいアニメ。

このアニメの主人公、モエサスより、彼女のライバルであるホレサスの方が、ツンデレで人気なのである。

そんな、ホレサスの決め台詞……。

「貴様に、今日を萌える資格はねえ……」

海野先生の顔から、笑顔が消え、どことなく『エクソシスト』の憑かれた少女を思い出させる怖い顔をした。片手に、包丁があつたせいか、本氣で怖かった。

「さて、今日の料理は『やきそば』です……」

空気を読まず、黒鮪は話を進める。

なんで、じついう時に限つて、普通にやるんだ、こいつ……。

まな板の上で、黒鮪はキヤベツを切る。その隣で、怖い表情が固定したまま喋らない海野先生が居た。頼むから、テレビで殺人をしないでくれ…。すると…。

ザクッ！

「わっ！」

黒鮪が、声を上げた。

どうやら、キヤベツを切つてている最中で、親指を切つてしまつたようだ。

緊急事態らしく、海野先生が慌てた。

「黒鮪先生！大丈夫ですか…」

「大丈夫です…」

黒鮪の指から、血が流れていた。

うわあ、生々しい…。まな板に血が飛び散つてゐる。

「止血を！」

海野先生が、スタッフに言い掛ける。

「大丈夫です…。こんなのは舐めておけば、平気です…」

そう黒鮪は言い、切つた親指を口に入れた。本当に、大丈夫かよ…。

チュパツ！ズルツ！チョパツ！チョパツ！

「…」

黒鮪は切つた親指を、なんか嫌な音を出して、しゃぶる…。えつ、親指をしゃぶる時つて、こんな音出るっけ…。舐める仕草も、なんか嫌だつた…。

海野先生の顔は、微動だにしない。強いて言えば、片手の包丁が、今にも、黒鮪を刺しそうだつた。

チヨパツ！チヨパツ！

その卑猥な音だけが、テレビから流れ続けた。もう十分間、黒鮪の指しゃぶりだった。たまに…。

「あつ…、ああ…、あつ…あつ…」

と、クロマグロが快楽の声を上げていた。

僕は立ち上がり、机から葉書を取る。そして、こう書いた。

『地獄に墮ちろ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981b/>

クロマグロ～発動篇～

2010年12月31日02時45分発行